

平成 29 年度研修会 講演録

全国各種学校協会



# 全国各種学校協会 平成 29 年度研修会

## 講演録

平成 29 年 6 月 13 日（火） 15：30 ～ 17：00 / アルカディア市ヶ谷 7 階 鳥海

### ◎テーマ：発達障がい・不登校生徒への対応について

#### 講演

#### 「発達障がい～その基本的理解～」

講師：松浦 真澄 東京理科大学 工学部 教養 准教授  
医療法人社団 こころとからだの元氣プラザ  
産業保健部 スーパーバイザー

#### 講演

#### 「高等専修学校での取組と実践」

講師：鍛冶田 千文 YMCA 学院高等学校副校長  
大阪 YMCA 国際専門学校高等課程副校長  
大阪 YMCA 発達支援事業責任者  
特別支援教育士

---

## 講演 「発達障がい ～その基本的理解～」

講師：松浦真澄  
東京理科大学 工学部 教養 准教授  
医療法人社団 こころとからだの元気プラザ  
産業保健部 スーパーバイザー



---

### ●はじめに

みなさん、こんにちは。本日はよろしくお願ひいたします。

東京理科大学という理系の大学に所属する人間が、なぜ発達障がいの話をするのか、不思議に思われるかも知れませんので、まずはそこから話させていただきます。私は心理学を専門にしている、現在の大学でも教養に所属し、一般教養の心理学などを教えています。以前は、もう一つの所属である「(医社)こころとからだの元気プラザ」というところで、企業のメンタルヘルス支援の仕事を中心に活動していました。そこで数多くの労働者の方がたのカウンセリングやコンサルテーションをおこなっていたのですが、たとえばエンジニアとしては凄く優秀なのに、管理職になりプロジェクトをまとめなさいとなると途端にうまく仕事ができなくなるというケースもありましたし、最近では新入社員がメンタルヘルス不調で働けなくなってしまうケースも増えています。今回のテーマである、発達障害に関連する相談も多くありました。そういった経験から、大学生のうちからメンタルヘルス教育やキャリア教育などを充実させる必要があるのではないか、と考えるようになったんです。

さて、今回は発達障害に関する基本的なレクチャーについてご依頼をいただきましたので、その辺りでの話をさせていただきます。

ちなみに「発達障がい」の「がい」の字については、世間でも議論があるようです。「害」は人に害を及ぼすイメージがあるからと「碍」の字を使う案もあり、たとえばIT企業のマイクロソフト社では「障碍」で統一表記されているそうです。ただ行政としては「障害」という漢字で統一していくという流れがあるようです。ですので、今回のタイトルには平仮名で「がい」と表記していますが、これから先のスライドや資料には「障害」で統一させています。

そしてこの時間の目標としては「発達障害について、その基本的な理解を得るための知識を身につける」として、発達障害を理解する下地をつくっていただくような構成としています。

### ●障害を理解し共生する企業

日本理科学工業株式会社という会社をご存知でしょうか？

黒板で使用するチョークにおいて全国的にトップシェアを持っている会社です。この企業は、障害者雇

用の実践でも非常に有名です。今回のテーマである発達障害ではなく、知的障害の方を積極的に雇用されているのですが、一例として紹介します。

知的障害者の方は文字や時計を正しく読めない場合や、作業内容を正しく理解することが難しい場合があります。そのためにこの会社では、たとえば文字ではなくイラストで表したり、作業時間を5、6種類の砂時計を使って示しているそうです。ほかにも、写真にあるような器具を使い、そのチョークのサイズが合っているかどうかはすぐわかるよう、工夫がなされています。このような工夫によって、世間一般では障害だと言われていることが、その職場においては「障害」ではなくなる訳です。中には類まれな能力を発揮して、社内で非常に頼りにされている方がおられるということです。このように、障害を持っている方が社会に参加し、給料を受け取り、働く喜びや生きがいを感じることができるということを実践されています。それはご自身にとっても、ご家族にとっても、地域にとっても素晴らしいことだと思います。

## ●「ちょっと困った人」「ちょっとヘンな人」と周りから思われてしまう

では発達障害の話に移りましょう。この時間の目的は、専門的で学術的な知識ではなくて、基本的な理解を深める準備ですので、あえて厳密さよりもイメージをつかむことを優先した内容にしてあります。というのも、発達障害は非常に幅広い概念ですし、個人々人によって特徴も大きく異なります。そのために、一概に「こうだ」「こういう支援がよい」と捉えようとするのは、あまり役に立たず、ひとりひとりの個性に応じた理解と支援が非常に重要となるんです。

そこで、まず入り口として、発達障害をもつ方や周りの方が体験することとして、例を挙げてみました。このようなことが起きて、周りからは「ちょっと困った人」「ちょっとヘンな人」だと思われてしまうことがあります。

少し前に「空気が読めない」＝「KY」という言葉が流行りました。あのような印象を持たれる方の中には、もしかすると発達障害の特徴を持つ方がおられると考えることができます。

<パネル>

- ・物事の優先順位をつけられない
- ・やるべきことを先延ばしにする
- ・仕事のミスが多い
- ・時間に遅れる
- ・約束を守れない
- ・忘れ物が多い
- ・人の話を聞かない
- ・人の気持ちがわからない
- ・場の空気が読めない
- ・落ち着きがない
- ・キレやすい
- ・後先考えずに行動する
- ・片づけが苦手
- ・人づきあいがうまくできない
- ・一方的にしゃべる

もちろん、これらの特徴を持っているからといって、そのまま発達障害だと診断されるものではありませんし、発達障害を持っている方がこれらすべての特徴を持っているわけでもありません。そして、発達障

害の特徴を持っているからといって、必ずしも社会的に適応できていない、というわけでもありません。実際に、私の友人知人の中にも、発達障害の特徴を持ちながら社会生活を送っている方が何人もいます。

## ●発達障害とは

発達障害は、主に脳の機能的な問題が原因で子供の発育や成長に遅れや歪みが生じるものだとされています。この認識は、学術や行政など少なくとも公になる部分では、広まってきています。しかし実際には、「育て方が悪かったのではないか」と自分たちを責め罪悪感を抱くご家族がおられることも、まだまだ多くあるようです。

また発達障害はまだまだ日本では新しい概念で、ご本人もこうした障害を持っていることを気づかずに生活していることもあります。そして、なぜか人間関係がうまくいかない、仕事がうまくいかない、勉強ができないと、悩んでしまったり自信を失ってしまったり、その理由や原因がわからないのでさらに混乱してしまったり、ということもあります。そこからうつ病になったり、アルコール依存症になったりと、二次的な障害が生じる可能性もあります。

発達障害は知的障害とは別なものです。両方を持っている方もいますが、知的には大変高い方が発達障害を持っているということも決して珍しくありません。例えば小さいころから成績がよく、一流大学を出て一流企業に入社したという方が、いざ仕事をやり始めるとうまくいかないということが起こる。そして専門医の診察を受けてみたところ、ASDを持っていたという場合もあります。大人になってから、「いままで自分が辛かったのは、そういうことだったのか」と自分自身を初めて理解できたり、周囲からの適切な支援や理解を得たりできる方がおられるわけです。

知的障害は、以前から法的にも社会的支援の対象となっていました。それに比べて発達障害に関する具体的支援はまだまだ始まったばかりです。たとえば、保育園や学校で早い段階でケアをしましょうという体制にはなっています。それでも見た目にはほとんどわからない場合も多いので、「ちょっと困った子だけけれど」「ちょっと苦手はあるけれど」、「でも勉強もできるし」「大きなトラブルにはなっていないし」ということで、適切な支援をうけるチャンスが得られないケースもあるようです。制度のさらなる充実が求められます。

## ●定義について

少しだけ専門的な話をします。いまの日本では、次の3つを総じて発達障害と呼ぶことにしています。ASD（自閉スペクトラム症）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、LD（学習障害）です。

ASDとは、以前は自閉症と呼ばれていた診断名と概ね一致しています。人間関係やコミュニケーションをとっていく能力がうまく発達していないという特徴をもちます。相手の表情を見て会話を進めていくとか、その場その場に応じてうまくふるまうことが難しかったりします。

スペクトラム（spectrum）とは、「意見・現象・症状などが、あいまいな境界を持ちながら連続していること」という意味合いがあります。虹のような色の帯は、どこまでが赤で、どこまでは黄色か、判断が難しいものです。自閉スペクトラム症も、ここからここまでのこういう特徴が問題であると判断するのが非常にあいまいで難しい障害であることから、こう表現されるようになり、学術的にも認定されるようになりました。

ですので、ひと口にASDといってもいろんな方がいます。ADHD、LDも同じで、またそれらが複数なりながら障害として持っている方もいます。これが現場の先生方や専門職の支援を難しくさせています。また「こういうのが発達障害です」と説明がしづらいので、世間への啓発の難しさにもつながっているように感じます。

ADHD = 注意欠陥多動性障害。みなさんが子どもの頃、学校で落ち着きのない子がいたかもしれませんが、そのような特徴をもっている方です。衝動的で不注意に動くので怪我をよくするとか、財布をよく落とすとか、忘れ物が多いとか、そうしたことも見られます。成人で働いている方の場合、とっても活動的で動き回ることができますので、体を壊すまで頑張り続けてしまう方もおられます。

LD (学習障害) は、たとえば全般的な学力は一般的なんだけど、ある特定の能力だけが著しく低いという場合があります。少しイメージしにくいかも知れませんが、文字を読むことが出来ない、計算が極端に苦手、書いてあるものは読めるが人が話していることを耳で聞いて理解することが苦手であるとか、そのような脳の特徴がここに含まれます。有名人では俳優のトム・クルーズがこの障害を持っていることで知られています。彼は LD の一種であるディスレクシアという障害を持っていて、文字を読むことができないそうです。なので映画のセリフは誰かに読み上げてもらい覚えるのだとききました。彼は LD という特徴を持っていても、努力や工夫し周囲からの支援を活用することで社会的に成功し、俳優としても活躍している有名な例ですね。

## ● 発達障害の代表的な特徴

このように 3 つの診断名について、その簡単な定義をお話ししました。ただし、繰り返しますが、個々人の特徴は本当に多様です。ですので、実際の生活場面の関わりにおいて「厳密な診断名」が役に立つことはあまりありません。ここでは発達障害について理解していくための基礎づくりが目的ですし、時間の関係もありますから、全体的に特徴を 3 つにわけて紹介します。さらに、それが障害であるか否かという、明確な境界線ではなく、「得意～不得意」「平気～苦手」というような程度の個人差・特徴として捉えてみたいと思います。

### 1) コミュニケーションの不得意、社会性の不得意

- ・ 表情から相手の気持ちを読み取る
- ・ 話の流れから文脈を理解する
- ・ 協調的な行動をする
- ・ TPO に応じた言動をとる
- ・ 相手の感情を推し量る

こういったことがとっても得意な人もいれば、そうでもない人、どちらかという苦手な人など、私たちの周りにはいろんな人がいるものです。その得意さの度合いは、人によって様々です。発達障害を持っている方の中には、これらのどれかあるいは複数のことが苦手である傾向があります。多くの方は日常の中で当たり前に行っていることですが、それがうまくできない、ということが起こります。どうして相手が怒ったのかわからない、あるいは相手が怒っていることがわからないということが起こります。いま説教をされているのはわかるし、とっても嫌なんだけど、なぜ説教されるのかわからないといったことも起こります。なぜか友達とうまく付き合えない。理由がわからないけど、仲間外れにされてしまった。それって、苦しいですね。そういう戸惑いや苦しみから、気分が落ち込んで行ったり自信を失っていったり、ということも起こってきます。

### 2) 想像・こだわり

- ・ 自分の決めたルールや習慣にこだわる
- ・ 変化に弱い



- ・応用がきかない
- ・ひとつの事に固執する

これらの点も、人によって様々ですね。発達障害を持つ方たちは、こういった傾向が強いことで、困難を抱える可能性があります。先々のことを予測して行動するのが難しかったり、ひとつのものへのこだわりを強く持ってしまうという方もおられます。自分の決めたルール、あるいはいつもの習慣の通りでない和不機嫌になる、あるいはパニックになる場合もあります。朝はこれをして、次にこれをと順番を決めておられる方もいます。このあたりが気にならない人は、急に予定が変わっても、「では今日はこう行動しよう」と臨機応変に対応するのですが、それが得意じゃない方もいます。変化に対応するのが苦手で、例えば予定が遅れていて、いつもの電車に乗れないと、それだけで落ち着かなくなったりパニックになったり。応用が苦手というのはたとえば、一度覚えたことは大丈夫でも、それを他の場面に合わせて活用するのが苦手、ということです。例を挙げると、年配の方とお会いする機会があった際に、辞儀をして敬語を使うと良いということを知り、その通りに行動することができるようになったとします。そうすると、次に年配の方とお会いした時には、きちんと礼儀正しく挨拶ができます。ただ、応用が苦手なので、公式の場でなくて近所の方と道ですれ違った時や、年配でなく年下の相手とのざっくばらんな席であったり、子ども相手にも同じ接し方をする、ということが起こったりします。それとこだわり、固執ですが、電車が好きとか、靴磨きが好きとか、周囲からは理解しにくいほどに特定のものに徹底してこだわる傾向があります。

### 3) 不注意・衝動性

- ・せっかち、落ち着きがない
- ・イライラしやすい
- ・衝動を抑えることが苦手
- ・片づけが苦手
- ・時間が守れない

注意を集中させるのが苦手、衝動的に動いてしまうというのは、ADHDに多くみられる特徴です。これも程度の違いであって、人それぞれです。たとえば私はせっかちな方ではないのですが、注意を集中させるのはかなり苦手です。注意が移ろいやすい、と表現したほうがよいかも知れません。たとえば、急ぎのメールをしなればと思っているのに、スマホに連絡が入るとそちらが気になり、そうしているうちに来客があったりして、などとやっているうちに、急いでいたはずのメールの事を忘れてしまうという事が多くあります。先にご説明した予測を立てて行動することが苦手なので、気をつけていないと仕事の段取りがうまくいかないことが多く起こるんです。これは結構困ります。

大学に来る前はそんなことはなかったのになあと感じていたんですが、よくよく振り返って考えてみたら、以前のカウンセリングの仕事をしていたときは一週間毎にカウンセリングの予約表が作成してあって、しっかりスケジュールが目に見えていました。今日は何時から〇〇さんとのカウンセリングがあって、この時間は空いているから書類をまとめる時間にあてて、△△さんへのメールはこちらの時間に作業しよう、あの報告書は明日のこの時間に、と自己管理ができていました。ところが大学に来ると、そもそも初めての職業のために知らない業務が多かったのもあるのですが、何よりも頼りになっていた「一週間毎の予約表」がなくなったことで、目に見える形でスケジュールを管理できなくなったんです。おかげで仕事の効率が落ちてしまいました。

その後、自分の特徴に改めて気づくことができ、「目に見えるスケジュール管理」をすることが自分には大切なんだとわかりました。そうして、具体的にスケジュールをまとめるようにしたんです。それから順



調に、特に事務処理の仕事が効率よく行えるようになりました。最近はじめた工夫としては、パソコンのモニタを2台にして、事務処理系はこちら、研究用はこちらと作業毎に分けるようにしたら、時間の使い方とか仕事の仕方がさらに楽になりました。つまりこれでやっと私も自分の能力の特徴に合わせた作業の仕方が整ってきたんだと思っています。いまは、もう1台モニタを増やし、さらに作業をわけて行うようにする計画も立てています。

こうした特徴を持つ方々に対して、以前までは多くの場合、あの子は仕事ができない、あの子は勉強のやる気がない、数学はできるのに国語はできないと、そのまま放置されていました。その中で本人もやる気を失う、家族も不安にさいなまれる、ということが起こっていましたが、最近はこの方にはこういう対応をすればいいのではないかと、実践が蓄積され、いろんな対処ができるようになってきました。

## ●本人への対応・配慮の例

私たちは普段、「適当にやっという」「早めに集合してください」「ちょっと急いでください」のような、曖昧な表現をたくさんしています。でも、この「適当」がどれくらいのものかは、厳密には人によって異なるはずですが、ただ、そのズレが問題にならない範囲のものだから、支障が起こっていないというだけなんですよね。でも、このズレが大きくなればなるほど、いろいろと難しいことが起こります。「早くやっという」と言われると、では「早く」とはいつのことか悩む、作業が止まる、あるいは何を置いても先にやり過ぎて怒られる。「適当に」と言われても、どんなものかわからない。

そういう場合には具体的に、「何時までに△個を完成させてください」といった表現を使うことで、お互いに理解しやすくなります。他にも、「過去の例ではこういうのがありますよ」と、サンプルを見せてその人にとってよりわかりやすい、説明の仕方や指示の出し方をする方法も効果的です。このように工夫をすることで、本人もその通りにこなすことができるようになります。言われた通りの事を、言われた通りにこなすのが、得意な人が多いのもこうした方々の特徴でもあります。

また、口頭による説明を耳で聞いても理解するのが難しい、耳で聞いたことを覚えるのが苦手、という方もいます。その場合には例えばフローチャートなどを作って、こうしたらこれ、その次はこれと視覚的に図示して説明することで、理解しやすくなる場合があります。理解力が弱いということではなくて、耳で聞いた情報処理が苦手なだけだということです。

注意の集中が苦手な人は、周りにいろんな人がいていろんなことをしゃべっている、そうするとそこに注意が向いてしまっているいろんなことに次々に注意が移ってしまい、目の前の作業に集中することが難しくなります。このような場合、例えば何かの作業をする際は、簡単な衝立を作って周りの人の姿を見えなくする方法があります。他にも、特別にヘッドホンや耳栓をして作業をしてもよい、という工夫をする場合もあるそうです。そうすることで余計な刺激が入ってこなくなり、目の前の仕事に集中することができるようになります。たったそれだけのことですが、本来の能力を発揮できることが可能になってきます。

他にも、複数の作業を並行して進めることが得意な人もいれば苦手な人もいます。それが極端に苦手な人に、そのような役割を振ってしまうと、持ち前の能力が活かされなくなるだけでなく、自信を失ってしまったり体調を崩すことにもなります。ですので、役割を変えることを検討することになります。例えば、緻密で間違えてはならない一つの作業を、毎日長時間繰り返さないといけない、というような役割をお願いするという場合があります。このような仕事は、もしかすると、同時進行で作業するのが得意な人にとっては、非常に難しい役割かも知れません。

## ●得意分野の例

このように、特徴を理解していくことで苦手なことばかりではなく、得意なことがみえてきます。営業関係の仕事はうまくいかなくて苦痛だった方が、たとえば ISO の担当などに異動になって、詳細な書類を作ったり管理する業務を完璧にこなす。というようなこともあります。また、精密機器の修理などを集中してできる人もいます。ほかにも、同じ作業を長時間繰り返す必要があるのだけれども、絶対にミスができない、というような場合にでも、高度な集中力を発揮して活躍されている方もいらっしゃいますし、数字に強いのでデータの分析や経理などに就くことで能力が生かされるという話も聞きました。

他にも、多くの方とは違う観点で物事を見ていて、独創的な発想ができるということから、新商品を開発するメンバーに抜擢されたり、新しい制度を作る際のオブザーバーとして活躍する等、その人がその特徴を持っているからこそその仕事につながったという話も聞かえてきます。

また、発達障害だったのではないかと、といわれている人の中には、それまでの常識や伝統に縛られない発想や行動力で、天才的な科学者や歴史上の偉人となった方々が多くいます。

## ●保護者との関わりにおいて

発達障害における法整備がさらに進んでいくと、子どもの発達障害について早い段階で認識される家庭が増えてくるだろうと思います。

それでも、見落とされる場合や十分に認識されない場合等もあるでしょう。それでも「あなたのお子さんは発達障害ですよ」と不用意に伝えたり、指摘することは危険です。慎重に、しかるべき立場の方が伝えることが大事で、まずは親御さんとの信頼関係を築いていくことが大切だと思います。また保護者が発達障害を認識している場合も、まずお母さんはどう感じたり、どう考えておられますか？と、こちらから現状を教わり、こちらはどのような支援をしていけるかを話し合いながら進めていくことが大切です。

わが子が発達障害を持っているという思いの中で、子どもの将来の不安を抱えながら暮らしている保護者の方に対して、ねぎらいや敬意をもってかかわっていくことが必要です。一緒に考えましょう、何かあったら連絡くださいと、そんな言葉をかけるだけで学校や企業との信頼が生まれる、安心するという親御さんは多々おられます。

なお最初に言ったように、発達障害といっても個々人によっては特徴は本当にさまざまです。ですから、専門家の意見や助言、支援を引き出していくことも大事だろうと思います。

## ●まとめ

- ・適切な配慮・支援によって、「問題」を緩和・解消できる
- ・診断・診断名よりも、(誰が)・何で・どのように困っているか？何が得意かなど、それぞれの状況に応じた対応を
- ・保護者の方との関わり・協働・提携を
- ・専門の支援機関・専門家との協働・連携を

以上、4つにまとめましたが、適切な理解があって、その上での配慮や支援をすることで、そこで起こってくる問題を軽くすることができるだろう、あるいは問題を得意分野に活かされることもあろうかと思っています。また明確に診断されている場合でも、どんな困りごとがあって、どんな支援ができるのか、何をすれば変化が起こるか、というような部分により注目をしたいと考えます。保護者の方や専門の支援機関などと一緒に協働で進めていけるような関係づくりやコミュニケーションも大切に進めて行ければと思います。

最後に追加での情報ですが、発達障害者支援センターという施設が全国にあります。関連施設もあります。大学等でも発達障害の学生さんへの支援に力を入れているところも増えてきました。こうして、個人や関係者への支援が整っていき、やがては障害が障害とまらない社会になっていくことを願っています。ご清聴、ありがとうございました。



---

## 講演 「高等専修学校での取組と実践」

講師：鍛冶田千文  
YMCA 学院高等学校副校長  
大阪 YMCA 国際専門学校高等課程副校長  
大阪 YMCA 発達支援事業責任者  
特別支援教育士



---

### ●はじめに

こんにちは。本日はよろしくお願いいたします。

### ●表現・コミュニケーション学科の創設

私はずっとYMCAで働いていて、17年前にYMCAのサポートクラスという療育のクラスを担当しました。発達障害の子どもたちのためのクラスです。

最初は普通に見えます。少しわがままかなという程度。つきあっていくと、あれ一方的だな、自分のことばかり話すなど感じ、でも困っていることは気づかなかったのです。それが親しくなっていくといろいろなことに困っていることに気づかされるようになりました。保護者からは、「この子の進路がない」「この子に合う高校がない」と相談されました。その子にわかる学び方ですと勉強はわかるようになる、でもそういった教育をしてくれる学校はない。コミュニケーションは苦手だけど、友達を欲しいと思っている。でもそれを練習する学校がないということです。何より14, 15歳の子たちが「ボクあかんねん」「ボクはアホやから生きている価値がない」、そう思っている子がたくさんいることに驚かされショックを受けました。それは違う、たまたま今の環境が悪いだけだと、なんとかこの子たちが自信をもって巣立つ学校を作りたいと、2005年、専修学校高等課程に多様な不登校生を受け入れる表現・コミュニケーション学科という学科を創設しました。

### ●表現・コミュニケーション学科の概要

それは発達障害の子たちばかりではなくて不登校の子や学校に馴染みにくかった子を対象として1学年35人の約100人の生徒がいる学科です。7割が元不登校児で、学校に行っていた子たちも、学校に馴染みにくく友達がいない、大半がいじめられた経験を持つ子たちです。発達障害の診断を受けている子は3割くらいいますが、診断を受けていなくてもその傾向があると思われる子はたくさんいます。特別支援学級からも例年5, 6人くらい来ますが、特別支援学級に行っていない方も行っていた方が良かったかなと思う生徒もいます。学力差は様々で、障害者手帳を持っている子もいますし、高い学力で大学に行く子たちもいます。今年同志社大学に入った卒業生は中学校は特別支援学級でした。コミュニケーション



ンが苦手ということで特別支援学級だったのですが、安心して学べる環境の中で友達をたくさん作り、学力もどんどん伸ばし同志社大学に合格しました。

スタッフは7人、そこにカウンセラーと特別支援コーディネーターで、おおむね10名で毎日動いています。生徒支援会議は毎週1回行っていて、日々たくさん起こるさまざまなケースを扱います。発達障害の課題は1回限りの対応では解決しません。友達との接し方や安心できる学校生活の送り方ということで、その子たちは継続支援会議で扱っています。非常勤の方は約25人で、教科会議を毎週1回、昼休みに集まって30分ほどで行っています。教科会議は教科に関することというよりも、生徒たちの授業中の様子といった内容が多く、小さい学校なのですべての生徒のことを全ての先生方に知っていただき配慮し同じ方向で支援していただけるよう備えています。ボランティアは約15人ほどいて、公立学校でいうと加配になるかもしれませんが、授業中だけではなく休み時間の話し相手などにもなっていただき一緒に支援しています。

## ●「表コミ」の4つのキーワード

私たちは表現・コミュニケーション学科のことを「表コミ」と呼び、「生徒の安心」「人とのかかわり」「学びの広がり」「自立への歩み」をキーワードに運営しています。

「生徒の安心」の基本としてまず、いじめ・中傷は許さないとはっきり申し上げています。何をもっていじめとかというと、その子がいじめられたと感じたらいじめと捉えます。ただこれは実際にはとっても難しいことで、被害者意識の強い子もいますし、何か自分が無視されたような気がするとか、自分だけ笑われたとか、私たちから見てそれはいじめではないかもしれないと思えるようなことはあっても、その子の話をしっかり聞くことを大切にしています。

特別支援教育士スーパーバイザーや言語聴覚士、カウンセラーも勤務し、隣に療育の部門があるので何かあればすぐに相談できる体制を整えています。担任は1学年2～3人で、1年生は3人の担任を置いています。副担任ではなく担任を置くという事は、それだけ手をかけた生徒がいるということです。

カウンセリングルーム、保健室の他に、小さな空間のフリールームというものも設けています。職員室の横にあり、疲れたら1時間そこで寛ぎ、授業に戻るといった場所です。生徒たちはこれを上手に使っています。そこにいるからサボっているという感じではなく、「あの子は今、調子悪いのだな」とクラスメイトが捉えているので、どの生徒も安心して利用できています。

## ●生徒が安心できる教室づくり

教室の様子ですが、今どきの言葉で言うと、ユニバーサルデザインを目指しています。誰にとっても安心できる環境で、誰にとってもわかりやすい授業が展開される教室づくりをしています。昔の学校は前方の黒板の上には学年の目標とか時間割が書いてありました。でも発達障害のある子はいろんなものがあると気が散ってしまいます。そこで前方は極力シンプルにすっきりさせ、教室の側面、右の方の黒板に掲示物を貼っています。

席は決まっている方が生徒たちは安心します。どこでも座っていいよとか、好きな子同士グループで座ってくださいというのは苦手なので、最初はすべて席を決めておきます。先生の話すことが理解しにくい、あるいは聴覚に問題のある子などは前の席にし、後ろに人がいると圧迫感を感じるという人は後ろの席でいつでも教室を出入りできるような席順にします。

一人用机はスタンダードなものより5センチ5センチ縦横大きくしています。昔の教科書はB5サイズでしたが、今はA4サイズと大きくなっていて、教科書を開く、ノート・筆箱を置くと生徒たちにとっては小さ

なスペースでは難しくなっています。そこで少しでも大きい方がいいだろうと、机のサイズを大きくしています。3人掛けの机も3人ではなく、2人で座るようにしています。これも圧迫感やたくさんの方がいるのが苦手な人が多いので、教室が潤沢にあるわけではなく限られた空間ではありますが、3人掛けは2人で使うようにしています。

## ●休憩時間・昼食時間

1年生が入学してきたときは、1人1冊ファイルを渡します。まず、時間割を配って自分のところは全部マーカーで塗ってもらいます。選択授業がある場合は教室が変わるので、それも確認し、ファイルの1ページ目に入れてもらいます。次に1週間分の持ち物、月曜日はコレ、火曜日はコレと書いているものを、2ページ目に入れるよう、ファイリングの仕方から教えていきます。ここを見たらすべてがわかるように、ここを見たら安心して学校に来られるように工夫をしています。最初はメモの取り方からわからない子もいます。明日の持ち物は定規、コンパスとチェックする際、その隣にレ点を入れる意味を知らない子もいました。

発達障害の子は習ったことはできるけど、習わなかったことはできにくく、応用が苦手です。例えばカップラーメンは通常お湯を注いで食べます。でも焼きそばタイプは湯を注いで、その後お湯を捨てて食べます。なんとなく応用できそうですが、それは別々に独立して扱うので、その2つを違うものとして覚える、というしんどさを持っています。

休み時間の過ごし方ですが、これが一番つらいそうです。授業中は自分の席があって先生がいて安心して過ごせますが、休憩時間はどうやって過ごしたらいいかわからない人がたくさんいます。小学校の頃、昼休みは運動場に行きなさいといわれるけれど、運動場に出て何をしたらいいかわからないという子がいます。高校生になっても休み時間は何をしたらいいか、戸惑うことが多いようです。そこで机で寝る、あるいは周りを遮断して本を読むなど、自分がどうふるまえばいいかわからない人が少なくありません。

トイレで昼食を食べるということもあります。ひとは小学校の歯科検診で歯が汚いといわれて、それがずっと心の傷として残っていて、以来、人前では口を開けず、いつもマスクをしていました。でも食事になるとマスクを取らざるを得ません。そこでトイレの中で食べていました。もう一人の子はどこで食事をしたらいいか、場所がわからなかったのですね。YMCAの通信制単位制高校の生徒で、通信制は毎時間授業によって教室が変わります。自分のホームルームクラスがないのでお昼休み「どこでも食べていいよ」という、「どこでもいい」がわかりにくいのです。そういう子にはここここは使っていいよと、具体的に指示をすべきでしたが、結局わからなくてトイレで食べたということ、保護者からの連絡でわかりました。大変申し訳ないことをしたと思っています。

## ●大切なのは誰にでもわかりやすいこと

彼らはいろんなことに不安を感じます。「先生、明日雨降るね」と言ってきた子がいます。「そうね」と返すと、彼は心配だと話をつづけました。いつもの教室には傘立てがあるからいいけど、明日の授業があるパソコン教室には傘立てがあるかどうかわからないから、今から濡れた傘が置けるか心配しているのです。

一度わかると心配は解消されるのですが、未経験のことが多い新入生は特に不安に感じます。明日の放課後はスポーツ大会の練習をするからTシャツに着替えましょうという、ある一人の子がどこで着替えたらいいかと尋ねてきます。男の子だからその辺で着替えたらいいよと思うのですが、「その辺で」とか「適当に」というのがわかりにくいのです。〇〇教室が空いていてそこは女子が入ってこないから大丈夫、「男子」の張り紙をするから大丈夫といったら、それなら大丈夫と安心するのです。つまり見通しの立たないことは不安なのです。

だから「誰にでもわかりやすい」ということを私たちはとても大事にしています。ロッカーも同じようにわかりやすさを重視しています。写真のようにロッカーは小学生のように鍵のかからないオープンなものです。他の学科は鍵のかかるロッカーですが、表コミではあえて扉をつけずオープンにしていることで安心を与えています。鍵はありませんが、13年間一度も物がなくなったこともトラブルになったこともありません。ゴミ箱などは外国人の学生もいるので、数カ国語の表記することでわかりやすく掲示しています。

## ●「人とのかかわり」を学ぶ

私たちの学校では「人とのかかわり」方を学ぶため、体験学習を積極的に行っています。誰もがクラスの一員として認められるようなクラスの仲間づくりからとても大事にしています。生徒にも3年間仲間づくりの練習ができますよといっています。

表コミで初めて友だちができる子は多く、すぐアドレス交換をします。すぐLINEの友だちになります。これはみなさんの学校でも同じだろうと思いますが、これによるトラブルが非常に多いです。返事がないと立て続けにメールを送る、LINEを送る。相手から返事がないと嫌われたかと不安に思う。みんなで取った写真を勝手にアップしたりする。そういうことは、やめようと言っていたのにと、またトラブルになります。経験不足の生徒たちですので、たくさんのトラブルがでてきますが、「3年間は仲間づくりの練習をしましょう、やり直しはきくよ」と話すことで生徒たちは安心します。そうして時間をかけて人間関係を構築し、最終的には卒業公演にもっていきます。

入学式前には2日間かけてオリエンテーションを行っています。大きなボールをみんなでまわす、速さを競う、一見単なるゲームのような人間関係トレーニングも行います。ボールを速く回すために、勢いをつけて相手に渡す子もいますが、それではうまく受け取れずかえって他の人が引いてしまいがちになります。そこでどうやったら早く回せるか、みんなで話します。すると、きついからゆっくり回そうとか、ゆっくり押そうとか、号令掛けようとか意見が出てきます。そしてこの場では自由に発言できる、自分の気持ちを受け止めてもらえる場なのだとして認識することで、生徒同士の関係がぐっと強くなります。速いことがいいわけではない、ということも学びます。

ハイタッチをするだけのゲームもあります。もともと目を合わせるのが苦手な子が多い中で、タイミングを合わせてハイタッチします。人に触れるのも嫌な生徒もいますが、それを練習していきます。そして最終的には互いに気持ちよく授業を受けるにはどうするかということにまでもっていきます。基本的にはまじめに勉強したいと思ってきている子たちなので、気持ちよく授業を受けるためにどうすべきか、興味を持って学習してくれます。間違った答えを言っても「え〜!!」とか言わないし、発言するのに時間がかかっても待つておくなど、優しい空間ができています。

## ●さまざまな学校行事を通して

仲間づくりのきっかけとなる、学校行事の準備にはかなり力を入れます。必ず昨年の様子を写真で映し、どんなところに泊まるかとか、どんな場所に行くか、説明します。見通しの立たないことには非常に不安を感じる人が多いので、事前にイメージをつけていきます。何か不安なことはないですか?とアンケートも取ります。「みんなと一緒に風呂に入りたくない」「虫はいるか?」などいろんな意見がある中でひとつひとつ先輩の意見も聞いて不安を減らしていきます。

グループ分けについては、1年の時は特に丁寧に本人たちの気持ちを聞きながら行います。文化祭などは必ずロールプレイをします。屋台を出すのですが、いきなり当日大勢の人が来て並んだりするとパニックになりますので、必ず一通り料理を作り、やってみます。コップを運ぶ練習にしても、コップを2つ持つ



場合、コップのふちを上から持ってみたり、ジュースを入れてから氷を入れてジュースをあふれさせたり、誰もがご家庭で当たり前で学んできたであろうことも抜けている子がたくさんいます。また常識でわかるだろうと思っていることも知らないことが大変多いです。だから必ず時間をかけて準備をしています。

課外での行事で、例えば電車に乗る場合、YMCAでは一番先頭と一番後方には乗らないようにしています。理由として駆け込み乗車が多いし、万一の脱線もあるし、飛込とか、先頭車両は特にリスクが高いからです。その為生徒と電車に乗る場合は、真ん中付近の車両に乗りますが、中にはこだわりが強い生徒もいますので、そういう場合は特例で先頭車両の運転席が見える場所に乗ることもします。

## ●通常授業の細かい気配り

授業についてはかなり学力にバラツキがあるので、学び直しができるように、それぞれが達成感を得られるようカリキュラムを組んでいます。

英語については少人数でクラス分けしています。各クラスの学習目標は違います。習熟度が高いクラスは大学受験、真ん中は専門学校、一番ゆっくりのクラスは社会の中で困らない英語力を身につけるという目標です。今、小学校ではフォニックス学習が取り入れられていますが、ゆっくりのクラスではこのカタカナ読みができる英語、フォニックスを取り入れています。これができると街中で Restaurant という長い単語を見ても、読むことができレストランかとわかります。街の中にたくさん読める英語があるというのは非常に有益で、英語は一番自己肯定感が上がるツールと捉えています。

それから板書ですが、黒板の言葉を写すのが非常に苦手な子が多くいます。前を見ていていったん頭の中で覚えて、ノートに書く、その後頭を上げるとどこが続きかわからなくなるというような子がいます。そこで黒板に書く内容は先にその生徒に渡したり、重要なところは赤い線を引いてもらうとか、配慮しています。また板書は写せなくてもパソコンが出来る子はパソコンの使用を許可していますし、どうしても時間がかかる子は授業が終わってから黒板を携帯カメラで撮ることも許可しています。こうした生徒への細かい配慮事項、合理的配慮については、本学教員向けハンドブックにもまとめて生徒支援に活かしています。

## ●枠がある方が生きやすい

授業の始まりと終わりは、はっきり言わないと分かりにくい子がいます。なんとなく終わってしまうと、「終わったの？終わったの？」と不安を次の授業にまで引きずってしまいます。そこで「これから授業を始めます」「これで授業を終わります」は、はっきり言うようにしています。あるときは、生徒がこのペットボトルを机の上においていいか、いけないか、を尋ねてきました。「自分で考えて決めて」というと「先生が決めてほしい」と押し問答がしばらく続きました。些細な出来事ですが、その時、この子たちは枠がある方が生きやすいのだと気づかされました。

(資料の) 時間割の青い時間帯の教科は習熟度別に分かります。黄色い部分は選択科目で、体育や美術は男女一緒ですが、ガンガンに運動したい人とゆっくり体育したい人、美術の課題をどんどんやっていきたい人とゆっくり進みたい人、それらを自分で選べる選択科目となっています。

マナーの授業も作りました。生徒が職員室の前まで来てじっと待っている。「〇〇先生と話したい」と、それがなかなか言えないのです。また先生が見えているのに「〇〇先生はいらっしゃいますか？」と尋ねる。「それは〇〇先生お願いしますというべきところだよ」と毎回説明するのが面倒臭くなりマナーの授業をはじめ、私が教壇に立つことにしました。彼らの中には筋力が弱く、だらしく見える生徒もいます。そこでまず姿勢から整えていきます。教室のマナーとしては消しゴムカスはどこに捨てるか、カップラーメンの汁はどこに捨てるか、そういったことも取り上げました。

## ●伝わるように伝える。言葉は具体的に

「ゴミは拾いなさい」では十分ではありません。「ゴミを拾ってゴミ箱に捨てなさい」といわないとゴミは捨ててもらえません。「掲示板を見てください」では見るだけで読んでてもらえません。これはテストでも起こりました。テスト問題に「下から記号を選びなさい」とあって、生徒は心の中で選んだといい、選んだ答えは解答欄には書かれず白紙となりました。電話でも同じようなことが起こります。「お母さんはいらっやいますか?」と尋ねると、「ハイ」と答えてそのまま無言。「お母さんに代わってもらえますか?」とまで言わないと取り次いでてもらえません。このように言葉通り受け取り、真の意味を読み取るのが苦手です。

夏休みに一人の生徒を学校に呼びました。「学校に来てください」と。しかし彼は来なかったので理由を聞きに電話すると、学校に来たという。YMCAに来て職員室の前まで来たけれど、そこからどこに行くかわからなかったから帰ったというのです。片道1時間半かかる道中をやってきたにもかかわらず、そこから職員室に声をかける発想は生まれなかったそうです。発達障害は真っ暗なトンネルの中を、懐中電灯をつけて見えるところだけを歩いているようなものと表現されます。彼も同様で、建物には通っているのに、4階に職員室があるとは知らなかったというのです。自分の用事のあるところしか見ていなかったのですね。彼は当初「どう?」とか「わかった?」という質問にまったく答えてくれませんでした。ところが3年の中頃に、「先生、それって質問しているの?」と聞いてきたのです。「どう?」「わかった?」の語尾の音程が上がる質問をしているとわかりそうなものですが、彼には質問されているとは思わなかったそうです。つまり「これについてどう思いますか?」と質問してくれたら答えられたと。この時もこんなことに困っていたのだと驚かされ、気づかされました。

## ●SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)の導入

次にソーシャル・スキル・トレーニングについてお話します。これは集団活動が苦手な子たちが多いために行っている授業です。例えば、教室でみんなの各役割分担を決めることがあります。その時、時間がないからと、ある子が「〇〇さんはコレ、〇〇さんはコレ」と決めてしまうことがあります。「え、私が〇〇係?」と実は戸惑っているけれどそのことを言えない、というようなことが、学校の中ではしばしば起こります。こうした事例を授業では取り上げます。こんな時は自分が思うことをどういえば相手を傷つけずに伝えられるか、そうしたことを考えます。我々は高等専修学校の自由なカリキュラムの中でこのように生徒に必要なものを組み込むようにしています。

個人への配慮で今どきの言葉で言うと、合理的配慮ということになるのだと思いますが、先ほどから申し上げているように生徒の気持ちを大事にしています。本来は「気のせいだよ」「そんなこと何とかなるよ」と言いたくなることはあるのですが、必ずいったんは生徒の気持ちを受け取るようにしています。これは教職員に対しても一緒に、教職員とミーティングをしている場合にも、「よくそんな意見をだすなあ」とムツと思うことはあっても、この人はこう考えている、この人はこう感じているのだといったん受け取るようにしています。そうすれば、自分の意見をわかってもらうためにはどうしたらいいか筋立てて考えられます。そうできるようになったのは生徒と長年接してきたことの恩恵だと思います。周りの教職員への対応も変わってきましたし、実は私は娘との関係がものすごく悪かったのですが、娘に意見した後、「生徒にこんな言い方しないよな」と思えるようになって、生徒に話しかけるようにあらためたら、親子関係も改善していきました。

## ●自分自身を守るための装い

さてたまにサングラスをかけてくる子もいます。これは人目が気になるからです。通学時間はサングラス

をかけていいし、規則違反ではありませんが、教室では「外せる？」と聞いていきます。マスクも同じ状況で、自分の顔が他人に見えないように、風邪ではなく自分を守るためにマスクをかけています。特に帽子やパーカーを被っている子は自分を守るため、他者と自分を遮断するためにあります。だから強引には外せないのですが、「外せますか～？」とか、「今いける～？」とか、「1年後は外そうな～」とか、声かけしながら徐々に外すことをしています。安心した環境と感じると彼らはそれを外すことができます。

服装がだらしなく、ズボンからシャツを出していたり、タオルをぶら下げていたりする生徒がたまにいます。そういう時、私たちは身だしなみとして注意します。でも「迷惑かけてないからいい」と大抵言い返してきます。そこで身だしなみの意味、人からどう見られているかなども話し、「きちんとしなさい」ではなく「シャツはズボンに入れる」「ハンカチやタオルはポケットの中に収めなさい」と具体的な言い方をし、身だしなみを身につけられるようにしています。

## ●時に過敏、時に鈍感

感覚が過敏だったり鈍感だったりして、真冬に半そでを着ている子もいます。平気だというけれど手はしもやけだったりします。

真夏の暑い時、広島に修学旅行に行った時は全身黒づくめの子がいました。真っ黒の長袖のコートを着て、いくら言っても脱がなくて、熱中症にならないか心配で、その子だけ頻繁に休憩取って水を飲ませました。このように独特の感覚がある生徒がいます。

特に耳が過敏に感じる子はかなりいます。水洗トイレの水の音が気になって流せないとか、蛍光灯のジリリという音が気になるとか。イヤホンをつけたりノイズキャンセリングをつけたりして対処している子もいます。ある時「どうしても〇〇さんの声が気になる」という生徒もいました。その時、私たちはそれがわがままなのか、それとも聴覚過敏なのか、判断に苦しんだのですが、いったんは話を聞くようにしました。英語のクラス内のことだったので「今より難しいクラスになるけどそちらに行く？」と選択肢を用意して、選ばせました。「難しいけどそこで頑張る」と本人が言うのでクラスを替えました。生徒たちがいろんなことを言ってきますが、それが勝手なのか、本当なのか、迷う時もありますが必ずいったん聞く。そして工夫し、最終的にできることとできないことを伝えています。

熱い、冷たい感覚も随分違います。野外料理をしているときに「やけどをした」と言ってくる子がいたので、その手を見てみると何ともなくて、彼が触ったというボールを触っても全然熱くないのです。でも「大変だ」というので、水で冷やしました。きっとその子にとっては凄く熱く感じたのだらうと思います。

「大怪我した」と大騒ぎする子もいて、よく見ると2ミリほどの小さな傷でしたが、それでも消毒して、バンドエイドよりも包帯がいいというので包帯を巻くことで彼は安心して次の行動に移ることができました。もしバンドエイドにしたら、彼はこれでは化膿する、指がなくなるなどいろんな不安を感じて落ち着けなかったと思います。

## ●入試も合理的配慮が当たり前

授業はもちろん試験に関しても発達障害といった生徒たちへの配慮が社会でも進みつつあります。センター試験の配慮により、昨年は本校から富山大学に合格する生徒も出ました。英語は苦手でしたが、理科と数学は抜群にできた子です。別室で、時間延長をしてもらいました。合理的配慮はその子への配慮があることで、みんなと同じように自身の力が発揮できるというものです。これはいままで不公平だとか、えこひいきだと考えられがちでしたが、その子の力をだすための支援が当たり前の時代になりつつあるのです。

2007年に特別支援教育が始まり、その子たちが高校生になりました。特別支援教育を公立学校で当たり前に受けてきた子たちが、私立高校に入ってそれがないと「えっ？それもしてもらえないの？」というようなことが起こるかもしれません。

今後すぐにできる例として字が読みづらい子たちには拡大プリントを渡す、試験で問題と答案用紙が別々になっている場合、左右に目を動かすのが彼らにとってはつらいので、問題の直後に解答欄があるようにします。ルビを打つ、あるいは英語をカタカナにするなど、今までは特別扱いと思ってきたことも、その子にもわかりやすい試験になるよう、配慮がなされるよう世の中が変わってきています。

## ●まとめ

先に述べたように彼らは変更が苦手なので、急に時間割が変わる場合などは、公にする前にその子に事前に「ごめんね」といいつつ報告します。「放課後残ってね」と突然言うとそれは難しいです。彼らの中には何時何分の電車に乗ると決めている子もいます。土日に何かしようとしたら、前もって伝えていかないと難しいと思います。というのは土日は学校が休みなので学校のことはしないと決めている子もいます。いろんなことが、生徒を見ているだけでもわからないことが多々あります。例えば生徒がなぜ集中できないのかその背景を考えます。できない生徒は今心の中に悩みがあるのか、それとも目の前の何か気がになっているのか、集中できないADHDのような発達の課題があるのか、原因がどこからきているのかを常に考えます。そしてその原因によって、我々の対応も変わります。集中できていないことだけを責めるのではなくて、何故その子がそうなっているのか、よく見るようにしています。

私たちが対面するのは高校生ですが、彼らが25歳、30歳の時に、誰とどう生きているかを見据えながら支援したいと思っています。生徒一人ひとりが幸せになり、幸せな大人が増えると、社会がやさしくなっていくと思います。いろんな思いを抱えて本校にやってきた子どもたちが幸せになってほしいと願い支援しています。ご清聴ありがとうございました。



# 資 料 編

高等専修学校での取組と実践



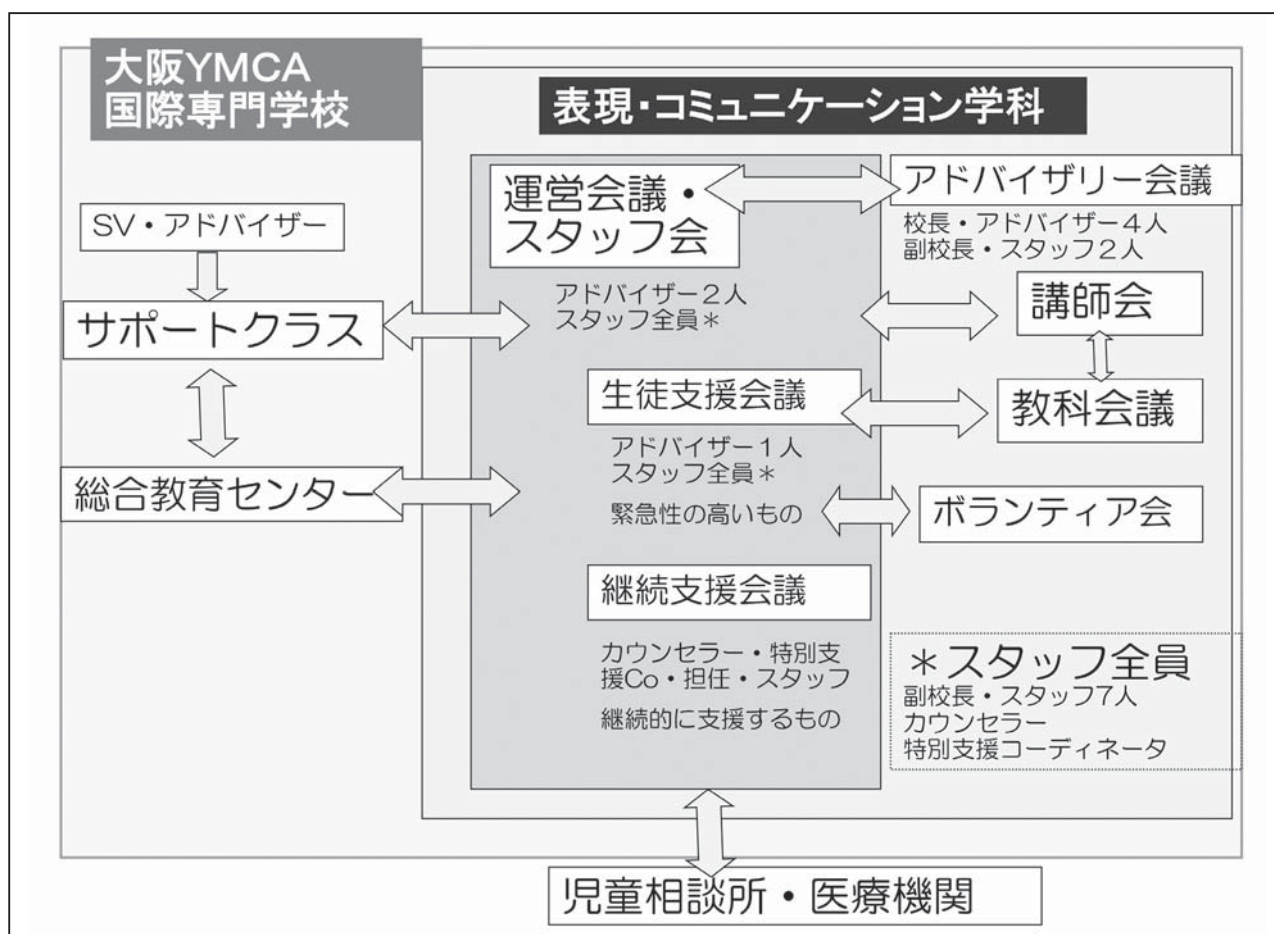
# 高等専修学校での取組と実践



大阪YMCA国際専門学校高等課程

表現・コミュニケーション学科

2017/6/13



## 表コミ

生徒の安心



人とのかかわり



学びの拡がり



自立への歩み

## 生徒の安心

●いじめ・中傷はゆるしません

●生徒支援のプロが常駐

特別支援教育士スーパーバイザー、言語聴覚士、カウンセラー

●担任2～3人制、学校全体で生徒を支援

●ボランティアが支える

●休憩できるホッとスペース

フリールーム・カウンセリングルーム・保健室





# 人とのかかわり

## ・仲間づくりの学校行事

## ・体験学習科目

	授 業	行 事
1年次	人間関係トレーニング 総合学習 HR SST（後期）	4月：入学前オリエンテーション 5月：デイキャンプ 7月：海洋キャンプ（2泊3日） 1月：六甲オーバーナイト（1泊2日）
2年次	コミュニケーション 総合学習 HR マナー／SST（前期）	6月：宿泊研修（2泊3日） 12月：演劇発表（45分） 2月：研究発表
3年次	演劇 総合学習 HR ライフスキル	5月：デイキャンプ 8月：卒業研究発表 8月：修学旅行（2泊3日） 2月：六甲卒業合宿（1泊2日） 3月：卒業公演（1時間半）

## ●○ 人間関係トレーニング ひとこま（例） ○●



## 学校行事の事前準備

### 個別のサポート

- 昨年度の写真でイメージをつける
- 事前にアンケートを取る  
→ 必要な生徒は個別面談を行う
- 先輩たちに話を聞く  
質問タイムの時間を設ける

### 集団のサポート

- 話し合い
  - ・ ねらい
  - ・ グループメンバー
  - ・ 行事のルール
  - ・ 自分の役割（ロールプレイ）
  - ・ 生徒主体のレクリエーション など

	1限 9:00~9:50	2限 10:00~10:50	3限 11:00~11:50	11:50 ~ 12:50	4限 12:50~13:40	5限 13:50~14:40	6限 14:50~15:40
月		選択授業		昼休み	体育	現代文	LHR
						現代文	
火		情報	現代社会		英語	古典	総合学習
		古典	英語		情報	作文	
水		情報	SST		英語	選択授業	
		現代社会			英語		
木		数学	作文		数学	英語	宗教
		英語	情報		現代文		
金	現代文	情報	コミュニケーション	コミュニケーション	美術 I		
	情報	数学					

## マナーの授業導入

- 挨拶・姿勢
- 第一印象（身だしなみ）
- 教室・公共の場
- 食事の場
- トイレの使い方
- 電話
- 面接練習 等



## SSTの導入 各グループ課題

### 自己理解

- 自己理解を深めながら、進路や対人関係構築に必要な力を養う

### 対人関係

- 自己理解を深めながら、進路や対人関係を中心にした問題解決力を養う

### 自己管理

- 授業態度、学習方法、コミュニケーション、進路選択に必要なスキルを学び、授業で実践し、自分の特徴にあった方法を見つける

## こんな事が...

えっ？  
荷物運び...

みんなの役割分担、時間ないから私が決めるね！ さよ子はレジにまわって。金尾君は...そうねえ、荷物運び。



こういう時、いつも、みさが決めるなあ...

## 個人への配慮

- 服装（サングラス・マスク・帽子等）
- 感覚過敏（聴覚・触覚・・・）
- 授業
- 試験
- 宿泊行事
- 医師・中学・進学先・公的機関等の連携

全国各種学校協会 平成29年度 役員名簿

役 職	県 名	氏 名	学 校 名
会 長	広島県	大橋 啓一	ひろしま美術研究所
副会長	富山県	瀬尾 陸奥	瀬尾学園 総合カレッジS E O
	兵庫県	帆苺 絹代	加古川ファッションカレッジ
理 事	栃木県	細野 美貴	真岡珠算簿記学校
	埼玉県	武藤 嘉之	大宮高等珠算学校
	千葉県	市原 啓	京葉調理師学校
	東京都	新井 時賛	赤門会日本語学校本校
	岐阜県	立木 博	立木珠算学校
	大阪府	佐藤 裕幸	大阪Y M C A 学院
	福岡県	古川 晃	田中重子製帽専門学院
監 事	石川県	坂本 繁夫	ドライビングスクールエクシール城東
	沖縄県	白岩 直明	沖縄写真デザイン工芸学校

全国各種学校協会 平成 29 年度研修会 講演録

平成 29 年 9 月

---

発行 全国各種学校協会

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25 私学会館別館11階

TEL : 03 (3230) 4814